

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2011

課題番号：23820027

研究課題名（和文）クリストファー・ドレッサーと関西の工芸

研究課題名（英文）A Study on the Relationship between Christopher Dresser and the Arts in the *Kansai* District during the *Meiji* era

研究代表者

竹内 有子 (TAKEUCHI YUKO)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：80613984

研究成果の概要（和文）：本課題は、クリストファー・ドレッサーと、明治期における関西の諸芸術・芸術関係者たちとの影響関係を探求するものである。ドレッサーと日本に関する先行研究においては、東京／中央の政府高官やデザイン関係者との接点を焦点化する試みがなされてきた。本研究では、ドレッサーと関西とのつながりを示す、京都の画家、久保田米僊の調査を行った。久保田は、日本画家のみならず著述家としても活躍し、工芸振興に積極的に関わった人物であった。彼は自著『美感新論』のなかで、ドレッサー『装飾デザインの原理』の一部を紹介している。久保田の色彩論を含む「デザイン」観は、ドレッサーとの共通性をみせるが、両者のデザイン思想には、英国と日本の諸芸術をめぐる環境から生じる、興味深い違いもあった。このような比較研究を行うことにより、両者の影響関係および類似点・相違点について考察した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine how Christopher Dresser had influenced the arts in the *Kansai* District during the Meiji era. Several studies have been made about the relationship between Dresser and Japan. However, studies which focus on the arts and crafts of Kansai are very few. Former studies focused on the discourse of art educators and promoters in Tokyo. To make this point clear, I investigated the art theory of Beisen Kubota. Kubota was not only a painter, but also a designer and a theorist. He quoted from Dresser's book: "*Principles of Decorative Design*" in his own book, "*The New Theory of Aesthetics (Bikan shinron)*". His ideas concerning "design" were affected by Dresser. However, there are interesting differentiations between them which originated from British and Japanese attitudes towards the arts. Thus, I compared both ideas and point out their similarities and differences.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：美術史、デザイン史、ジャポニズム、日英交流

1. 研究開始当初の背景

本研究は、19世紀後半に英国で活躍した産業デザイナー、クリストファー・ドレッサー(Christopher Dresser, 1834-1904)の「日本礼賛者」としての諸活動に焦点を当て、「ドレッサーが見た日本(英国側)」だけでなく、「見られた日本(日本側)」の反応を調査し、日英芸術文化交流史における相互関係の一端を明らかにしようとするものである。

ドレッサーと日本の接点については、これまでの先行研究で、来日時時の活動の詳細・意義、明治のデザイン振興を担った政府高官との人的交流と、ドレッサーのデザイン原理と日本礼賛との関係性が明らかにされてきた。またジャポニズムの観点から、ドレッサーの作品における日本工芸の影響関係に照明が当てられもしてきた。

しかし、ドレッサーが来日した際の訪問地には関西地方が多く含まれており、京都では知事や高官と共に勸業場や織殿工場を視察している。さらに彼および彼の家族が神戸で日本工芸を扱う商社に関与した事実を考えるならば、ドレッサーと関西の関係性を示す新しい知見が得られる可能性が高い。

他方、クリストファー・ドレッサー研究の多くは、英国の歴史家ニコラス・ペヴスナーの影響下に、ドレッサーの機能主義に通じる合目的造形やそれを示す言説・デザイン作品に注意を払い、ドレッサーを「モダン・デザインの先駆者」と位置付ける立場が優勢である。そして、彼が早い段階で、簡素な形態に釉薬を大胆に掛け流した陶磁器など、皮相的な「ジャポネズリー」から先進的な「ジャポニズム」、西洋人が好む日本趣味ではなく日本工芸の深い理解によって、デザイン製品を制作するようになったことを強調する。そのうえで、来日後、彼がバウハウスを予見させるような装飾を排した製品(金属器)をデザインしたことから、その日本趣味・日本的要素が「モダン・デザイン」に寄与した影響について示唆する。このことから、彼の日本趣味的側面とモダン・デザインに先駆ける造形面がいかなる関係にあるのか、「ジャポニズム」と「モダニズム」の関係性についても再検討が必要である。

これらが、研究当初における認識と問題意識であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで詳細に研究されることのなかった、ドレッサーと関西の美術・工芸界との影響関係の調査を行うことである。近年の、ドレッサーと日本に関する先行研究においては、彼の訪問の概要を具体化しつつ、東京/中央の政府高官やデザイン関係者との交流・影響関係を焦点化する試みが

なされてきた。しかし、その影響関係のありようについては、未だ概括的および断片的な記述にとどまっている。本研究では、彼の視察地が関西を中心としていた事実を鑑み、地方性へと目を向けた。

ドレッサーは、欧米にあって最も早い段階で日本の工芸を賞賛した人物であった。1860年代以降、彼は日本美術・工芸に関する講演を意欲的に行い、イギリスにおけるジャポニズムを牽引した。各国で開催される万国博覧会に参加しては、日本の品物を見る機会に恵まれ、東洋の品々を扱う商社の設立にも関与する。爾来、日本製品を供給することで西洋の日本趣味の需要に応じながら、さらにデザイナーとしては、日本的要素をデザイン源に取り入れる実践を行った。これらの事実から、彼の「ジャポニスト」としての位置、さらには「モダニスト」と呼称されてきたドレッサー像の見直し等に関する検討を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

ドレッサーと関西の関係を調査するに当たっては、明治期の新聞・雑誌等、同時代の資料収集と閲覧に努めた。

神戸とのつながりについては、神戸市文書館において、資料の閲覧を行い、ドレッサーの家族に関する消息を調査した。京都との関連については、京都博覧会および三井家との接点の可能性を推定していたので、三井文庫や国会図書館にて調査を行った。

この過程で、今回、明治デザイン研究がご専門の先学より、関西とドレッサーの接点を示す、様々な資料のご提供と貴重なご助言を頂くことができ、調査が大きく進展し、方向転換することになった。ここに至って、久保田米僊がドレッサーの論述を参照している興味深い事実が判明した。

ドレッサーのデザイン観を検討するには、来日時時の経験を記した、『日本——その建築、美術、美術製品 Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures』(1882年)にある、日光東照宮についての記述が重要である。そのため、同地へ赴き、記述内容と実際との照合を行った。

またそのほかにも文献の精査を行い、英国側のジャポニズムや唯美主義運動、日本側の美術・工芸をめぐる状況との関連についての基礎的事実の把握・分析を行った。

4. 研究成果

同時代におけるドレッサーと家族の足跡や、関西の人的交流関係に関しては、ジャーナリズムがそれほど発達していない時期ということもあり、新規情報の発見は、少数にとどまった。

しかし、京都との関係性については、今回新たに、久保田米僊(1852-1906年)とドレッサーの繋がりを見出すことができた。久保田に関する先行研究は数少なく、それらは日本画家としての立場のみが焦点化されたものである。また、これまで殆ど注目されてこなかったが、彼は著述家でもあり、美と芸術に関する著作がある。

久保田米僊の芸術活動は、当時において実に多彩かつ先進的であった。彼は、京都美術の近代化に尽力しただけでなく、国内外の境界、諸芸術の枠組みを超える実績を残した。四条派の鈴木百年に師事した後、南画・西洋画・歴史画・時事風俗画・漫画・挿絵等、幅広い種類の画を手がけた。幸野楳嶺らとともに京都府画学校(1880年開校)や、京都青年絵画研究会(1886年)、絵画と美術工藝が一体となった展覧会の開催を目指すべく、京都美術協会(1890年)の創設に貢献した。また第一回内国絵画共進会(1884年)においては、京都の総代として出品を説き、二回にわたり審査員を務めた。京都日日新聞社から「絵入新聞」「我楽多珍報」の発行(1881年)に携わり、同地のジャーナリズムの発展についても企図した。このとおり、久保田は、東京に比べて遅れていた京都の芸術文化振興の土壌を整備すべく奔走した。さらに東上してからは、国民新聞のジャーナリスト、石川県工芸学校の絵画教授等を数年務め、失明後は芸術評論に携わることとなる。

彼の海外経験もまた、同時代人と比するならば、突出していた。1889年にはパリ万博に出品、「水中遊魚」の図で金賞を受賞する。これに際して私費で渡欧を果たして数か月の遊学を行い、林忠正の知遇を得ている。また93年には、シカゴ万博への参加で渡米した折には、フィラデルフィアで「建築意匠家のフワネス氏と懇意」になり、彼の地の美術界で芸術交流を成した。また1894年、アメリカの芸術家ヘンリー・ボウイ(Henry Pike Bowie, 1848-1921)は、久保田のもとで画を学び、日本画に関する著書を彼との思い出に捧げている。彼が西洋との接触で広めた見聞は、ドレッサーのデザイン論の紹介を含め、後の芸術論において十分に開陳されている。

本研究では、デザイン啓蒙に注力した著述家としての久保田のデザイン観と、ドレッサーの影響関係を追い、比較研究を行う。久保田は、日本画家でありながら工芸振興に積極的に関わった人物であった。明治デザインの黎明期の、ことに関西にあっては、稀有な存在である。以下、久保田とドレッサーの接点をはじめに、両者のデザイン論および色彩論を示す。

まず、明治期の美術・工芸振興を担った中央の高官・芸術関係者たちが、ドレッサーの『装飾デザインの原理 *Principles of*

Decorative Design』の紹介(山本五郎「意匠説」では、ドレッサーの色彩論を、手島精一「苦氏図按原則」では器物に関する論)の抄訳を紹介していることが判明した。そして、久保田米僊『美感新論』が、同書の色彩論の翻訳していることもわかった。そこで、デザイナー／ドレッサーにおける色彩調和論の意義を検討した。彼の色彩論は、官立デザイン学校の師、レッドグレイヴ(Richard Redgrave, 1804-88)『色彩の基本便覧 *An Elementary Manual of Colour*』(1853年)と、ジョーンズ(Owen Jones, 1809-1874)『装飾芸術における色彩の諸原理を定義する試論 *An Attempt to define the Principles which should regulate the Employment of Colour in the Decorative Arts*』(1852年)の著述を通じて、英国の化学者フィールド(George Field, 1777-1854)『クロマトグラフィー *Chromatography*』(1835年)、仏のシュヴルール(Michel Eugène Chevreul, 1786-1889)『色彩の同時対比の法則 *Law of Simultaneous Contrast of Colours*』(パリ1839年)『調和的着色の法則 *Laws of Harmonious Colouring*』(1838年)の理論に依拠しているとみられる。以上を踏まえ、画家／久保田にとっての色彩論の意義を、明治日本の芸術・産業を取り巻く背景を含め、考察した。

そのほかにも、久保田の「色彩」「デザイン」に関する著述を調べると、そこにはドレッサーの著述を参照したと思われるところが多くあった。両者の比較を通じて、久保田の「デザイン」観が、ドレッサーのデザイン論との共通性を見出すことが出来た。しかし両者の職能は、英国の「デザイナー」と、日本の「画家」であり、両国では「美術」をめぐる土壌が異なるため、その解釈には興味深い違いがあることもわかった。

このように、日本側のデザインに関わる調査が中心を占めたため、「ジャポニスト」・「モダニスト」と称されるドレッサー像の見直しについては、範囲が広くなりすぎるため、考察するまでに至らなかった。この点については引き続き、検討課題としたい。

ただ、久保田米僊とドレッサーの比較研究については、これまで全く試みられていないので、本研究の意義はそこにあり、一定の成果を残すことができたと思う。さらに、19世紀の英日の色彩論の関係について言及した先行研究も少ないため、本課題は新たな調査の契機を形作り、今後の発展性が期待できる研究ともなった。

筆者は現在、「頭脳循環を加速化する若手研究者海外派遣プログラム」の派遣研究者として英国に留学中である。この「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究一日英間に広がる21世紀の地平」の関連ワークショップ

で、現地調査により得た最新の研究成果を口頭発表する予定であり、また平成 24 年度末に刊行予定の研究成果報告書にも、本研究の発展課題を加えた論文が掲載される見込みである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

竹内有子、「リチャード・レッドグレイヴの絵画とデザイン」、『フィロカリア』、査読無、大阪大学文学研究科、第 29 号、(2012)、1-15

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 有子 (TAKEUCHI YUKO)
大阪大学・文学研究科・招へい研究員
研究者番号：80613984

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし